

第3表 予想進路の誤差発現回数分布表 (誤差のとり方は前表参照)

誤差	≤ 0.5	0.6~1.0	1.1~1.5	1.6~2.0	2.1~2.5	2.6~3.0	3.1≤
24時間後	17	11	0	1	0	0	0
48時間後	5	6	1	2	1	0	2

報の発展にまつほかかわないと思われる。

参考文献

- 1) 中島暢太郎, 福長光男: 1962年, 空間平均図の予想図を考慮に入れた台風の進路予報, 近畿地区研究会報告 昭和37年度

- 2) 中西 盈: 空間平均図による台風の進路予想, 予報技術検討会報告 昭和34年度
- 3) 西本清吉: 円形擾乱の移動理論と台風への応用, 気象集誌, 38, No. 6.
- 4) 藤範晃雄, 福長光男: 空間平均図による台風の進路予想, 予報技術検討会報告 昭和37年度

世界日

中村 繁

1957年7月から1958年にかけて実施された IGY は地球物理学的な現象を解明するためにもうけられたもので, 全世界で協力して色々な観測がおこなわれ, 有益な資料が得られました. IGY 期間中特に観測強化期間として世界日 (World Day) という期間をもうけ, この時にはできるだけ高々度まで観測するように決められている.

IGY 終了後もこの世界日の制度は存続され, 今なおこの観測は行なわれている.

この世界日の続けられている経緯について少しふりかえてみよう.

1950年ブラッセルで開かれたイオン層合同委員会において1957年から1958年にかけて第3回の polar year を行なおうということが ICSU (International Council of scientific Unions—国際科学連合)傘下の各連合と WMO とによって決議された.

しかし, 地球物理学的立場から今回はもっと広範囲な観測をしようという提案を WMO と IUGG (International Union of Geodesy and Geodesy and Geophysic — 国際測地学地球物理連合)がおこない polar year を IGY に拡張することにした. その計画を1952年10月に ICSU の中に設けられた IGY 特別委員会 (CSAGI) が受持つことになった.

CSAGI の要望によって WMO は IGY 作業委員会をつくりこれが CSAGI の主導権を握ることになった.

CSAGI 第1回の会合は 1953年6月30~7月3日に開かれ WMO, IUGG などの意見をまとめ予備的なプロ

ラムをつくった. このプログラムは IGY を実施する上に基本となるもので, これをもとにして各機関で観測計画が作られ川畑幸夫氏の出席した1953年8月~9月に開かれた WMO の第1回高層気象委員会では世界日 (Rec 23 CAe-I)のことが勧告された. WMO の IGY 作業委員会は色々検討してやや確定した計画を立て, これは1955年4月の執行委員会 (Res 2 EC-VI) と5月の総会 (Re^S 23 Cg-II) で承認され, 1955年9月8日~16日にブラッセルで開かれた第3回の CSAGI の会議で最終的に IGY 計画として決定をみた.

このプログラム中に世界日をきめた基準とその世界日を示すカレンダーが決められた. 世界日には RWD (Regular World Days), SWI (Special World Intervals), WMI (World Meteorological Intervals) とがあり, 世界日には1日4回可能な高さ (30~40km) まで観測するように勧告されている.

IGY も終りに近い1958年7月 CSAGI は第5回の会議を開き IGY 終了後の1959年にも全く同じ規模で観測資料収集をおこなうことを決め IGC (International Geophysical Co-operation—国際地球協力年) と名づけた.

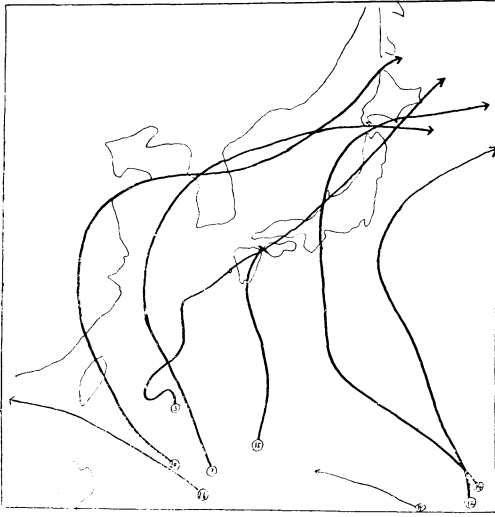
このことは1958年10月の ICSU の総会で WMO は書面投票で IGC に協力することに決められた*.

1960年以後は1958年に ICSU 中にもうけられた IWDS (International World Days Service) が IGY, IGC の世界日設定の線にそって世界日をきめ WMO もこの線に沿って動いている**.

1962年は今までの RWI, WMI, IRW (International Rocket Weeks) など別々にあったものを統合して一本のものとし WSI (World Synoptic Intervals) すること (8頁へつづく)

* WMO Bulletin Vol. 8, No. 1, 1959.

** ,, ,, Vol. 10, No. 1, 1961.



第15図 1962年8月の台風経路

気圧になっているため、1956年12月の場とは異なるので、1960年は類似年とはとれないがC型(Ⅲ型)となる。故に長期予報は、1961年8月には本邦に上陸する台風はないことになった。実際の8月台風は第13図の通りで、一個宮崎県に上陸した台風があったが、これは規模も極めて小さくその後急速に消滅してしまった点から考えて、大体台風らしい台風は上陸しなかったといえる。

1962年については、第14図の資料から、1961年12月もともにⅢ型にはいることがわかる。さらに類似年を求めると1948年がもっともよい。そこで予想は、1962年8月の台風は比較的高緯度で発生し、北上傾向をもち易く、発生数は多い方で本邦に接近し上陸する台風は2~3個で、殊によると西日本で暴風雨の可能性もあるかも知れない。結果は第15図のように、発生数(前月末発生も含む)は9個で多く、発生場所は比較的高緯度で3個本邦に上陸した。また14号が東海近畿地方で暴風雨をもたら

(14頁よりつづく)

にした。

また1963年には WSI という名を WGI (World Geophysysiel Intervals) にかえ地球物理学的な観測を一定した期間に綜合しておこなうようにした。なお1964年からはじまる IQSY からは10日間の世界日を14日にのばすことになっている (Res 18 EC-XIV)。

した。

6. む す び

台風の長期予報となると、発生数とか本土に接近する数とかを統計的にまた週期的にそして相蜀的に求めた方法はある。ここで述べた方法は、少なくとも一年を通じての大循環の過程・季節の移り変わりという一連の流れの中での現象をとらえ、冬期北半球を支配する actio, energy としての極の寒気の現われ方、その存在位置が夏の極東付近にどのように影響するかという点に重点をおいて関連性を求め、それから間接的に台風経路を予想したものである。2ヶ年の実際に行なった予報の結果からわかるように、半年も前からかなりの程度の予想ができる点は利用度の高い法則となり得る。広島在任中いろいろご教示くださった本庁藤本主任予報官に深謝します。

参 考 文 献

- 1) 根山芳晴 (1961): 春と秋の台風経路の類似性について, 天気, 9, 153~159
- 2) H. Riehl (1944): The Recurvature of Tropical Storms: J. Met. Vol. 1, No. 42.
- 3) 大谷東平 (1955): 台風の話, 岩波新書.
- 4) 西村伝三 (1957): 台風の進路予想, 気象協会.
- 5) 高橋浩一郎 (1952): 台風の移動の予報について最近の気象学第2集.
- 6) 杉浦, 藤原 (1952): 台風の進路および台風に伴なう降雨の型: 最近の気象学, 第2集.
- 7) 笠原 彰, 増田善信 (1956): 台風論, 気象学講座第11巻, 地人書館.
- 8) 三好 利, 都成本是夫 (1958): 台風経路の統計的研究, 研時, 10, 513~516
- 9) 植本九州男, 山口薩男 (1960): 予報法則の探求 (1) 一周極流の非対称が暖溼期の天気におよぼす結果および対流圏上部の不安定と台風の進路について, 研時, 11, 976~985

昨年末発表された1963年のカレンダーによると本年のWGIは1月, 4月, 7月, 10月の16~25日である。高層観測もこの期間のものは高々度まで観測できる器材を使ったり、電気ゾンデや露点ゾンデなどの特殊な観測もおこなっているので各種の調査を行なうにはより資料がそろっている。
(気象庁高層課)